

筆者あとがき

私にとって経済同友会の歴史を書くのは三度目である。「十年史」と「十五年史」と、そして今回の「三十年史」である。同友会の歴史としては、それ以前に山下静一氏（現在・専務理事）が物した『経済同友会五年史』がある。

私が毎日新聞の経済記者として、官庁詰めから転じて民間担当になったのは、昭和二十二年ごろであった。日本工業倶楽部一階、玄関の向かって右側にある小さい部屋が、「経済団体記者会」に当てられていた。同友会が発足して一年そこそここのころで、われわれ「財界記者」の五、六人が毎晩のように、新しい「財界エリート」を相手に議論をぶっつけ合ったのである。記者室に呼ぶこともあれば、工業倶楽部二階の小談話室に招かれることもある。共通していたのは、主として先方がひっさげてきた一升ビンの冷や酒をおおりながら、とりとめもない論議を繰りひろげたことである。諸井貫一、水野成夫、大塚萬丈、永野重雄、浅尾新甫、郷司浩平、東海林武雄、今里廣記などが、われわれの「客」であった。諸井、水野、大塚、浅尾の諸先輩はすでに故人となられ、記者側の論客の一人であった「朝日」の上田秀夫君も、先日世を去った。三十年の歲月は、やはり長いのである。

山下さんに頼まれて「十年史」を書いたのは、このような私と同友会との因縁があったからであ

る。戦後経済史や労働運動史の資料がまだ余り整理されていない時代で、それに私としても初めての長篇であったため、苦心して取り組んだ。それでも、主として日常の記者活動のうちに取りあげた問題も多かったので、楽しい仕事であった。続く「十五年史」は、前期十年分を「十年史」の圧縮に待って、最近五年史を加えるだけで、余り張り合いのある仕事ではなかった。

そして「三十年史」である。このたびは時の代表幹事・木川田一隆氏からも、ついでの機会にダメを押された。とはいえ、元来これは「二十五年史」として、昭和四十五年の初めごろ執筆依頼を受けたのであった。そのころまでに、私としてはいろいろの仕事を通じて、戦後経済史の概略が頭の中にあつたし、資料となるべき文献も、豊富に、手の届くところにあつた。私は大いに張り切つて、作業に取りかかった。

同友会の活動の分野は広い。それは年を経るにしたがつて広がった。経済、政治、労働のほか、外交、教育、社会の各般にまたがつていた。このような広範な活動を、背景としての客観情勢との関係において、本格的に精細に綴ろうという途方もない意図を私は抱いたのである。そして、遮二無二、突進した。本を集め、本を読み、それを最大限に活用して、書いた。夜を日についで、まる二年半にわたつて書いた。昭和四十八年一月末に書き上げた。原稿は四百字詰で四千五百枚に達した。

そんな長大なものが、そのまま刊行されようとは私も思っていなかった。その原稿を「資料・経済同友会史」（未定稿）といった格好にして、新たにそれを材料としながら、所定の長さや形のものを作仕上げようという含みもあつた。いずれにしても、ある姿勢で始めた以上は、その姿勢でやり通し、

後は後の事として考えればよい、という気持で終始したのである。

昭和四十八年といえ、同友会の二十八年度に当たる。「二十五年史」としては遅すぎる。同友会はその原稿をもとにして「三十年史」を出すことに、方針を決めた。

ことし昭和五十一年の五月下旬、改めて「三十年史」の完成を頼まれた。「手に持って読める本」ということで、長さは千五百枚と定められた。再び作業が始まったが、このたびは比較的気軽であった。「前期十五年」は、同友会の書庫から発見された新しい資料を取り入れて、「概観」した。「十年史」「十五年史」のほか、「旧稿」の要点をも参照しながら、二百枚のものを「序篇」としてまとめた。最近の三年間の事歴は、当然のことながら新しく書き下ろした。まんなかの十二年間については、「旧稿」を横ににらみながら、背景の記述を極度に端折り、原稿としては別に書き直した。

経済同友会の三十年は、まじめで進取的・先見的な「経営者」の「自覚と反省」の歴史であった。彼らはつねに、現実を正視し、時代を先取りして考えた。そして、つねに自らの在り方を反省し、新しい時代の使命を自覚した。しかも彼らは行動した。討議し、勉強し、自らをたしなめるとともに、政府・政治に対して物を言い、また社会に呼びかけた。世界の経済・社会を「足」で学び、国際的に対話を交し、討議をつくし、そして国際的に提言した。

私は、同友会の「経営者」における考え方の発展過程と、広がりゆく実践活動の軌跡を、必要な限りでの客観的背景事情とともに、一貫的な流れとして記述することを心掛けた。この意味で、この「三十年史」は、「戦後経営者の思想と行動」の歴史という、実質をそなえるものになったと思う。「時

代の先駆者」と言い「求道者」と言ったのは、実感そのままの表現である。

本文を脱稿したのは十月二十日、総前書きが出来たのが十月二十五日で、長さは合わせて、ちょうど千五百枚となった。期限と枚数が注文どおりにおさまるといふのは、気分のよいものである。

百五十日間に千五百枚を書くのは、気軽とはいふものの、かなりの苦勞であった。ほとんど毎日、夜中の二時か三時ごろ起きて、机に向かった。夕方からビールを飲んで、その勢いで九時ごろ床に入り、たちまち高イビキ、そして目が覚めた時から、その日の勝負が始まる——そういう日々であった。寝不足と過勞のせいか、右の眉の上にウイルスが巢食い、ちょっとした「お岩さん」のように腫れあがる十日間もあった。

ともあれ「經濟同友会三十年史」が、このような形で世に出るに至ったのは、一にかかって、木川田・山下両氏の破格の寛容と理解に負うものである。ここに改めて、感謝とお詫びの意を表したい。

同友会事務局の松田健資氏には、「旧稿」執筆のころ以来、ながながと、お世話になった。資料の収集、提供のほか、事実の確認、とくに会活動の実感的解説など、貴重な協力をして頂いた。時折り夕方、仕事にくたびれたころ、思いがけず松田さんが、「冷たいビールを持って来ましたよ」と、屈託のない「米丸師匠」ばりの顔を見せてくれたのが、何よりも嬉しかった。いろいろの意味をこめて、「有難う」である。

七年ごしの仕事を終った今、私は戦後の長い記者生活を想起しつつ、その間に親しくし、また指導してもらった多くの「同友会の人々」の面影を、思い浮かべる。そして、こうした人たちの好意に、

「せめてものお返しができた」という気持を、私はひそかに感じるのである。この書は私の「私物」ではないが、よく人がするように「亡き人に捧げる」とすれば、私は大塚萬丈と水野成夫と、それに畏友・上田秀夫の名を挙げたい。

次は「最近十年史」になるとして、「経済同友会五十年史」を書くべき人は、今どこで何をしているのであろうか。

昭和五十一年十月二十七日

羽間乙彦